慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プルーストとフロベール : 料理と旅の描写について
Sub Title	Proust et Flaubert : cuisine et voyage
Author	牛場, 暁夫(Ushiba, Akio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.3 (2006. 12) ,p.117(212)- 142(187)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鷲見洋一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910003-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プルーストとフロベール
——料理と旅の描写について——

牛場　暁夫

≪招宴≫

プルーストはフロベールを高く評価し、彼から強い影響を受けていた。書簡においても、« (...) j'admire infiniment Flaubert » (*Corr.*, XVIII, p.391[1])と書いている。« La seule manière de défendre la langue, c'est de l'attaquer »(*Corr.*, VIII, p.277, *Cf. Corr.*, VII, p.168) とも書いているが、その「革命家たち」のひとりにフロベールの名前を挙げている。　また、フロベールを偉大な音楽的な作家だと数回にわたり指摘している（*Jean Santeuil*, p.486[2]. « Camille Saint-Saëns », *Essais et articles*, p.385[3]. « A propos du « style » de Flaubert », *Id., ibid.* p.595.）。実際、プルーストはフロベールのように深夜に自分の文章を音読していた（*Corr.*, XVI, p.29[4]）。プルーストの手になるフロベールの模作は、そのシリーズのなかでも重要な位置を占めているし、1920 年 1 月に発表された評論「フロベールの「文体」について」からは、プルースト自身の創作の原点の一端さえうかがうことができるのである。したがって、この二人の作家を比較検討する先行研究は、アニィック・ブイヤゲやミレイユ・ナチュレルによるものをはじめ以前から多くなされてきた[5]。しかし、時としてバルザックよりもフロベールに親近感をおぼえるプルーストの作品からは（*Corr.*, X, p.295）、後者からの影響がまだ多く指摘できるのである。

『失われた時』の料理や旅の場面からは、フロベールの文章が透けて見

えてくる。たとえば、『見出された時』には、『サランボー』第一章「饗宴」の文ときわめて類似する文章が書かれている。「饗宴」の最後には、バルカ家秘蔵の宝石で飾られた魚を傭兵たちがつかまえ、それを鍋の熱湯のなかにほうりこみ、その魚がもがき苦しむさまを見て、傭兵たちが貪婪な食欲をおぼえる箇所があるが、この数行にわたる描写は、『見出された時』のゲルマント大公夫人邸での午後の集いにおいて主人公が久しぶりにゲルマント公爵夫人を見かけ、その老いに驚く際に、多少手を加えられてはいるものの、ほぼそのままの形で用いられていると思われる（*Corr.*, t. XVI,p.19）。まず、フロベールの描写。

> (...) de gros poissons, qui portaient des pierreries à la gueule, apparuent vers la surface. (...) C'étaient les poissons de la famille Barca. Tous descendainet de ces lottes primordiales qui avaient fait éclore l'oeuf mystique où se cachait la Déesse. L'idée de commetre un sacrilège ranima la gourmandise des Mercenaires [6].

つぎに、プルーストによって多少書き直されたと思われる箇所。描写が、≪浮き上がってくる魚－宝石－家の聖なるもの－周囲の人々がおぼえる冒涜的強い関心≫という順序で特異な諸要素が展開されていて、これは両者に共通するものである。

> (...) je venais de la voir, passant entre une double haie de curieux qui (...) émus devant cette tête rousse, ce corps saumoné émergeant à peine de ses ailerons de dentelle noire, et étranglé de joyaux, le regardaient, dans la sinuosité héréditaire de ses lignes, comme ils eussent fait de quelque vieux poisson sacré, chargé de pierreries, en lequel s'incarnait le Génie protecteur de la famille de Guermantes(*TR.*, IV, p.505).

フロベールの作品においては食事の場面がしばしば描かれるが、そこに

供される料理の皿数は多く、種類もきわめて多彩なものとなっている[7]。まず、『ボヴァリー夫人』におけるエンマの結婚式の宴では、肉料理だけでも——大きく切ったサーロイン、若鶏のフリカッセ、羊の股の焼肉、子牛肉のシチュー、腸詰を付け合わせた子豚の丸焼き——五種類も数えられ、二段構えに盛りあげられ頂上にチョコレート製ブランコまで乗せられたウデイング・ケーキまで入れると、大変な数の料理、酒、デザートが列挙されてゆく。宴のほうも夜通しつづく。

また、ノルマンディの寒村での新婚生活に退屈し倦怠をおぼえはじめたエンマがダンデルヴィリエ侯爵家の舞踏会に招待される際においても、晩餐や、夜食や、翌日の最後の午餐までがくわしく述べられ、ここでもふんだんに振る舞われる料理が快活な貪欲さでもって羅列されてゆく。まず、肉、伊勢海老、鶉、果物など九種類の品が晩餐に登場する。

> Emma se sentit, en entrant, enveloppée par un air chaud, mélange du parfum des fleurs et du beau linge, du fumet des viandes et de l'odeur des truffes. Les bougies des candélabres allongeaient des flammes sur les cloches d'argent, les cristaux à facettes, couverts d'une buée mate, se renvoyaient des rayons pâles ; des bouquets étaient en ligne sur toute la longeur de la table, et, dans les assiettes à large bordure, les serviettes arrangées en manières de bonnet d'évêque, tenaient entre le bâillement de leurs deux plis chacune un petit pain de forme ovale. Les pattes rouges des homards dépassaient les plats ; de gros fruits dans des corbeilles à jour s'étageaient sur la mousse ; les cailles avaient leurs plumes, des fumée montaient (...)[8].

はじめてパイナップルを食べ、桜桃酒（マスカラン）入りのアイス・クリームを食べ、「匙をくわえたまま目を半眼に閉じた」エンマは陶然となるが、夜食にはさらにスープ、プディング、コールド・ミートが並ぶ。午前三時になり招客たちはまばらになるが、エンマは夫シャルルと翌日の最後の午餐まで残る。

また、『サランボー』でも冒頭から、そして結末においても、大規模な

「饗宴」が開かれる。昆虫や子犬までが出される珍味佳肴による椀飯振る舞いに、さらに六種類の肉料理が盛られ、これらを傭兵たちが貪欲に食べてゆく場面がこの第一章の大半を占めている。権力や性への欲望のうずまく「円形劇場[9]」への導入としての役割をこの強烈な描写ははたしている。

指摘しておかなければならない点は、フロベールにあってはこれらの大変な品数の、珍味を含んだきわめて多彩な料理が、美食とか食卓の慣例に従わずに雑然と一気に登場することである。海や山といったいくつかの産地別にまとめられたうえで並べられるわけでもなく、主菜、副菜といったメニューの品別順に配列されてもいない。種々雑多な料理はさまざまな方面から偶然に集められてきたように描写される。『ボヴァリー夫人』における侯爵邸での饗宴の場合でも、描写はまずいきなり数種類の肉料理の羅列からはじまり、つぎにパン、海老、果物の順で描かれ、また鶉という肉料理に戻る。いわゆる会食の慣行となっているコースは無視されて、フロベールの筆は四方八方にのびやかに奔放に走ってゆく。*Notes de voyage* でも、肉、魚、鶏肉、果物、イノシシの肉、ひき肉、ゼリー、煮込み、ムースの順で料理が描かれ、肉料理だけでいくつかまとめることも配慮されていない[10]。作者は快活に美食の、また日常の基準から逸脱し、皿の数の無秩序なまでの増殖に筆をゆだねている。関心のありようは一定方向に狭く限定され整理されてしまうのではなく、食卓という舞台は多方向から感覚的に活性化され、スペクタクル的ともいえる活気にわれわれを巻きこみ大きく拡がってゆく。凡庸な夫とノルマンディの村の生活に退屈し、倦怠をおぼえるボヴァリー夫人は、漠としたロマネスクな恋愛の夢、現実脱出の夢を追うが、彼女のその秘められた願望はすでにこうした料理の場面によってより明確な形を取りはじめるのである。

ボヴァリー夫人はヨンヴィルに引越した際も、ヨンヴィルの関係者への挨拶もそこそこに「金獅子」館の調理室の暖炉に直行する。このときも準備に長い行数がさかれた料理は、それから展開される彼女とレオンとの不倫を予告する役目を果たしている――「ボヴァリー夫人は調理室にはいると暖炉ぎわに寄った。二本の指先でドレスの膝をつまみ、踝まで裾をから

げると、焼き串に刺さってまわっている羊の股肉のうえから、黒靴をはいた脚を火にかざした。火は彼女の全身を照らし、ドレスの横糸や、白い肌に浮かぶなめらかな毛穴や、ときどきまたたく瞼までも、どぎつい光で刺し貫いた。半開きの扉から風が吹き入るごとに、大きな赤い色がさっと彼女のうえをかすめた。暖炉の向こう側から金髪の青年（レオンのこと）が黙って彼女を見つめていた」。

『失われた時』のコンブレでの印象深い「日曜の昼食」「土曜の昼食」の描写についても、同様のことが指摘できよう。ここにおいても日曜日というやはり祝祭的な雰囲気のもとでレオニー叔母の料理係りフランソワーズの手になる盛餐 — フランスでは以前は夕食よりも昼食が盛餐になることが多かった — が繰り広げられ、異様なほどの数の、また多種多様な料理がここでも慣行を逸脱しつつ多方面から食卓に登場する。

Car, au fond permanent d'oeufs, des côtelettes, de pommes de terre, de confitures, de biscuits, qu'elle ne nous annonçait même plus, Françoise ajoutait – selon les travaux des champs et des vergers, le fruit de la marée, les hasards du commerce, les politesses des voisins et son propre génie, et si bien que notre menu, comme ces quetre-feuilles qu'on scultait au XIIIe siècle au portail des cathédrales, reflétait un peu le rythme des saisons et les épisodes de la vie : une barbue parce que la marchande lui en avait garanti la fraîcheur, une dinde parce qu'elle en avait vu une belle au marché de Roussainville-le Pin, des cardons à la moelle parce qu'elle ne nous avit pas encore fait de cette manière-là, un gigot rôti parce que le grand air creuse et qu'il avait bien le temps de descendre d'ici sept heures, des épinards pour changer, des abricots parce que c'était encire une rareté, des groseilles parce que dans quinze jours il n'y en aurait plus, des framboises que M. Swann avait apportées exprès, des cerises, les premières qui vinssent du cerisier du jardin après deux ans qu'il n'en donnait plus, du fromage à la crème que j'aimais bien autrefois, un gâteau aux amandes parce qu'elle avait commandé la veille, une brioche parce que c'était notre tour de l'offrir.

Quant tout cela était fini, composée expressément pour nous, mais dédiée plus spécialement à mon père qui était amateur, une crème au chocolat, inspiration, attention personelle de Françoise, nous était offerte, furtive et légère comme une oeuvre de circonstance où elle avait mis tout son talent. Celui qui eût refusé d'en goûter en disant : « J'ai fini, je n'ai plus faim », se serait immédiatement ravalé au rang de ces goujats qui, même dans le présent qu'un artiste leur fait d'une de ses oeuvres, regardent au poids et à la matière alors que n'y valent que l'intention et la signature. Même en laisser une seule goutte dans le plat eût témoigné de la même impolitesse que se lever avant la fin du morceau au nez du compositeur (*Sw.*, I, pp.70-71).

ここには主菜だけでも七種類は出てくるし、その他の品も合わせると料理は全部で二十三品は数えられる。パン、コートレット、じゃがいも、ジャム、ビスケット、野菜、海の幸とつづき、ここでも食材の産地は海や山といった遠方をふくめて多様である。グールメとか個人的な嗜好という狭い論理で選択がなされているわけでもない。肉料理だけでも四品は登場するものの、そのあいだにじゃがいも、ジャム、ビスケット、畑と果樹園の出来具合、近所の心づくし、海の幸が挿入されていて、ここではテーブルという枠は希薄であり、賑やかさが広く四方八方に編みなされてゆくといった伸びやかさが感じられる。フロベールの料理の描写におけるそれよりもさらに種々雑多な生きた要素によって——しかし現実描写を無視することなく——独特の自由奔放な想像の時空間が生成し展開しはじめている。

当時フランスでは料理は一気に食卓に並べられていたが、1880 年頃からこの給仕の仕方は変わり、皿の味をよりはっきりと見分けるようにするために順次一皿ずつ給仕される今日のやり方に取って代わられている [11]。しかし、プルーストは 1913 年刊行の『スワン家のほうへ』においても相変わらず古い逸楽的な「フランス式給仕法」に従っている。

執筆段階においても、プルーストはカイエ 30 においてこれらの「海の幸、商人から手に入る思いがけない食べもの、フランソワーズの天分のひ

らめき」を加筆によって追加挿入している。また、oeuvre が oeuvres にされるなど、数箇所において単数名詞を複数名詞に変えているが、こうした複数名詞の使用は、アルベール・チボーデが次のように分析するようにフロベールの文体の特徴的な点でもある――« le pluriel est incorporé ici à la rêverie, qui multiplie et vaporise tout : il annule les lignes nettes que prendraient les objets individuels » .[12]

また、教会さえもがこの味覚の一大スペクタクルに積極的に参加してくる。それは「教会から親しくやってきた祝別パン」とか、「私たちのメニュには、十三世紀にほうぼうの大聖堂の正面入口に彫刻されたあの四つ葉模様のように、四季のリズムと生活の挿話とがいくらか反映されていた」(最終稿における加筆追加) とか、「私たちが教会にお供えする当番であったからブリオッシュが出される」といった表現から十分に感じとられるはずである。食材はすでにコンブレの狭い慣例慣行を打ち破って動き、聖と俗の境をも容易に越境する闊達な勢い――それはプルーストにおける教会が時として見せる特質でもあるが――を秘めたものとしても提示されている。

また、フランソワーズが日曜日に腕によりをかけて作るこれらの圧倒的なまでの料理が芸術作品にたとえられてゆくのは、プルーストの特徴でもある。「作曲者」――最終稿における加筆追加――や、二度にわたって使用される「作品」や、「芸術家」といった語は、引用したきわめて長い文の末尾に集中して用いられている。

なお、レオニー叔母の料理係りフランソワーズは母親からも大事に扱われているが、エンマの腹心でもあり、また『純な心』にも登場する働き者の女中 Félicité などから造形された人物であることはすでにミレイユ・ナチュレルによって確かめられている[13]。フランソワーズが目をかけている「食料品店の店員」テオドールも、フェリシテに恋をするフロベールのテオドールから想が得られている。なお、フランソワーズは、カイエ初期のカイエにおいては時として Félicie とも書かれている (I, *Sw.*, p.726, 963)。

この長文の直後には、フランソワーズの下台所にかんする文が書かれて

いる。ここで扱われる三種類の食材も、彼女の下台所まで「かなり遠方の部落からやって来る」のであって、コンブレの小さな単調な日常はここでも食材たちによって軽々と越境され、食材は狭い時空間を打ち破って大きく繰り広げはじめている。しかも、ここでは文末にフロベールの文章において時として見られるオチ（chute）までがつけられている。二人の作家が共通して使うこのオチについても比べてみよう。まず、プルーストの下台所の文—— On apercevait son dallage rouge et luisant comme du porphyre. Elle avait moins l'air de l'antre de Françoise que d'un petit temple à Vénus. Elle regorgeait des offrandes de légumes, venus parfois de hameaux assez lointains pour lui dédier les premices de leurs champs. Et son faîte était toujours couronné du roucoulement d'une colombe (*Sw.*, I, p.71).

この文は、『ボヴァリー夫人』におけるルオーの裕福そうな整えられた農場内の物置の次の文——やはり最後にオチ（chute）がつけられた——を想起させる。

> C'était une ferme de bonne apparence. (...) La bergerie était longue, la grange était haute, à murs lisse comme la main. Il y avait sous la hagar deux grandes charettes et quatre charrues, avec leurs fouets, leurs colliers, leurs équipages complets, dont les toisons de laine bleus se salissaient à la poussière fine qui tombait des greniers. La cour allait en montant, plantée d'arbres symétriquement espacés, et le bruit gai d'un troupeau d'oies retentissait près de la mare(*Madame Bovary*, p.303).

フランソワーズの下台所も、ルオーの農場の羊小屋も手入れが行き届き、きちんと仕舞いこまれている食材や、馬具なども細部にいたるまで写実的で古典的ともいえる構文によって丁寧に描きこまれてゆく。しかし、文末においては、それぞれ鳩の鳴き声と、鵞鳥の群れの鳴き声が響きはじめ、そのやかましい卑俗な鳴き声によってそれまでの視覚による理知的な描写が一気に——皮肉もこめて——覆されている。この文末においてそれまで

の文の流れとは異なる要素が挿入される特徴的なオチ（chute）の文型は、プルーストが行なったフロベールの模作（« Mondanité de Bouvard et Pécuchet » dans *La Revue blanche* en 1893, repris dans *Les Plaisirs et les Jours*, sous le titre «Mondanité et mélomanie de Bouvard et Pécuchet »）のなかでプルーストによって独自の解釈が施されたうえですでに試みてもいる(*Op., cit.* p.57-65)。

また、コンブレのルーサンヴィル＝ル＝パンの市場に買出しに行くフランソワーズのために、土曜日は主人公の家族はふだんより一時間ほど早く昼食の食卓を囲むのだが、ここにおいては食事によって空間だけでなく、時間上の慣例も乱されることになる。「均整をかき乱すこの土曜日」(*Sw.*, I, p.109)がやってくることは、コンブレという「おだやかで閉ざされた社会」のなかではすでに「ほとんど全市民のものともいえる小事件のひとつ」にさえなる。実際、5 月は「マリアの月」と呼ばれ、土曜日になるとマリアに捧げられた特別な祭式がコンブレでも夜に行なわれ、主人公たちはそこで作曲家ヴァントゥイユに出会うし、主人公はサンザシの花が好きになりはじめる。つまり、土曜日になると主人公の将来を決定するような「小事件」にいくつも出くわすのだ。また、フランソワーズは自分の時計でさえいつも読み違え、2 時なら、「1 時」あるいは「3 時」と読んでしまい(*P.*, III, p.142)、それは矯正しがたい欠点とされている。

また、土曜に市の立つルーサンヴィル・ル・パンの一部を構成しているルーサンヴィルは、主人公が百姓女にたいして性的欲望をおぼえる村であり、ジルベルトが友人たちと性的な遊びにふける場所でもある(I, *Sw.*, p.154-156. IV, Tr., p.269)。料理は実は日常生活以外の次元へ誘う契機ともなっているのである。

多くの料理が出される日曜も同様に事件が多く起きる日である。プチット・マドレーヌによる無意識的記憶によって喚起されるのは、まずはコンブレの毎日曜日の朝なのであり、ミサに出掛けるまえにレオニー叔母によって出されたマドレーヌ菓子の味や香りが蘇ってくるのだ。また、コンブレの日曜に主人公は読書にもふけり、作家ベルゴットと会う機会がスワ

ンによって与えられることになる曜日ともなっている。

フロベール『純な心』の女中フェリシテも、「毎週木曜日」にはトランプ・ゲームを楽しみに来る客たちをもてなし、「毎週月曜日」には小作人たちが市が盛んになる時刻に鶏だのチーズだのを売りに来るのを巧みに扱う。料理はここでは週一回のペースで小事件を引き起こす。

コンブレの日常生活は「いつも相変わらず」(*Sw.*, I, p.108) でもあり、「カースト制度」(*Sw.*, I, p.16)さえ思わせる保守的な側面もとどめているし、町の造りも中世以来城壁に囲まれて変わらないのだが、日曜と土曜の昼食に登場する食材などが見せる動きは、既成の不動の生活習慣の時空間を混乱させ、より大きく広い展開を反復して繰りひろげはじめてゆく。日々の勤労と日常生活の余白にのみ置かれ、それも二義的な意味合いしか与えられてこなかった食卓は、「日曜日の昼食」「土曜日の昼食」といった盛餐などを機に、抑えられてきた欲動が多様に活動し発揮されるより大きな舞台へと間歇的にではあるものの変貌する。

アニック・ブイヤゲは、コンブレにおいては教会やレオニー叔母を中心として一日の時間スケジュールは絶対的なものであるが、次第に例外がそこに入りこみはじめるとこを指摘している。またコンブレの日曜が物語のなかで果たす機能は、同じ反復法(récit itératif)で語られているフロベール『ボヴァリー夫人』の木曜日と共通しているとも分析している。毎週木曜日なるとエンマは、ピアノの稽古を口実にルーアンまで出掛け、レオンとの密会を楽しむのである [14]。また、フロベールから影響を受けたプルーストの文体によって、コンブレなどの日常生活には、なのかしら度を越えたものが含まれることになったともブイヤゲは書いている [15]。

こうして料理は新しい世界に入るための契機にもなっているのだが、その際二人の作家ともピーテル・ブリューゲルの絵画から想を得ることがあったことも指摘しておきたい。ミレイユ・ナチュレルによってくわしく跡付けられているが、二人ともそれぞれ実生活においてブリューゲルの作品を見ていて、プルーストは 1902 年のオランダ旅行の際にベルトラン・ド・フェヌロンと一緒にブリューゲルを見ている。また、フロベールもブ

リューゲルの絵画作品「聖アントワーヌの誘惑」から想を得て同名の小説を創作している。さらに、プルーストはこのフロベールの小説『聖アントワーヌの誘惑』を 1909 年に読んでいる。また、フロベールの *Notes de Voyage* を読んで影響を受けたプルーストは、コンブレでの散歩の帰りの、旺盛な食欲への楽しみを描く箇所にそれを反映させて次のような文章を書いている [16]。

> (...) il y avait encore un reflet du couchant sur les vitres de la maison et un bandeau de pourpre au fond des bois du Calvaire qui se reflétait plus loin dans l'étang, rougeur qui, accompagnée souvent d'un froid assez vif, s'associait dans mon esprit, à la rougeur du feu au-dessus duquel rôtissait le poulet qui ferait succéder pour moi au plaisir poétique donné par la promenade, le plaisir de la gourmandise, de la chaleur et du repos(*Sw.*,I,p.131).

また、第三巻『ゲルマントのほう』において描かれるドンシエールでの大饗宴の場面も、やはりブリューゲルの絵にたとえられる。そのときにドンシエールでもやはり「お祭り」が始まっていて、近隣からだけでなく、「地方からも大勢の人たち」が集まって来ているのだが、ホテルの中庭と台所では、数々の魚類や、肥えた若鶏や、大雷鳥や、山しぎや、鳩などの料理が、「古い時代の素朴さとフランドル派絵画の誇張とで描かれた福音書のある食事」(*G.*, I, p.397) にたとえられて思い起こされている。『ゲルマントのほう』の巻では、社交界の生活がつぶさに描かれるのだが、その閉鎖的な集まりが続くなかにあって、ドンシエールでの饗宴や、これにつづく祖母からの電話の挿話は、異なった新たな世界の展開を予告するものともなっている。プルーストの場合、料理を教会(「福音書」)や芸術(「フランドル絵画」)にまで関連づけることによって料理そのものの価値を高めようとするが、その意図はここにおいても看取できるのである。

食材によって編みなされる賑やかな一大饗宴は、第五巻『囚われの女』冒頭でも繰りかえされる。やはり日曜日(*Pr.*, III, p.646, 650)にパリの貴族街

を食材を主に売り歩く物売りのいくつもの声は、ここにおいても「(物売りという) 種々さまざまな楽器のためにたくみに書き分けられた民謡から編曲された」「祝日のための序曲」にたとえられ、コンブレの日曜日の昼食が音楽の作品にたとえられたのと呼応しつつもさらに大掛かりなものにされている。また、食材を売り歩く行商たちの「愉快な」売り声は、歌劇だけでなく、司祭による詩篇詠唱やグレゴリア聖歌にも数度にわたり比較され、古い教会が思いおこされもするし、この点でもコンブレの昼食と同じく聖と俗の対照的な構成要素でこの交響の広がりは編まれてゆく。アルベルチーヌはこれらの売り声を好み、フランソワーズを買いにやらす。そしてアルベルチーヌは奔放なまでの食欲（あるいは性欲）にふけることになる。主人公はアルベルチーヌに影響され、それまでは嫌っていた貝などに食欲をおぼえるようになる。食材は、タマキビ貝、エスカルゴ、アーチチョーク、山羊の乳、牡蠣、小海老、エイ、鯖、ムール貝、レタス、アスパラガス、タマネギ、ニンジン、キャベツ、オレンジ、インゲンの順で売り歩かれるが、全部で 16 種類とここでも品数は多く多種多彩でもある。さらにはここにおいても海の幸、野菜、果物、乳製品などが一定の順序にしたがうことなく売り歩かれているわけでもない。束縛から解き放たれたような列挙によって、新鮮でのびやかな広い時空間が四方八方から編まれてゆく。

プルーストは、その「フロベールの「文体」について」において、彼の作品においては事物が文の主語になることが多いと指摘し、「事物も、人間と同じくらい生命を持っている」(*C.S.B.*, p.588)とし、これによって小説の「革命は完成した」と書いている。食材という事物は、たんなる描写の対象として付随的な「添え物」(accesoire)として描かれるだけにとどまらず、ひそかに登場人物さえ行なえないような行為をすでにひそかにではあれ欲動という形で反復しつつ演じはじめているのだ。

実際、フロベールは大変な健啖家でもあったし、実はプルーストも若い一時期そうであった。前者は書簡に吐露している—— « En rentrant, j'ai senti un grand besoin de manger d'un pâté de venaison et de boire du vin blanc ; mes

lèvres frémissaient et mon gosier séchait. Oui j'en étais malade, c'est une chose étrange comme le spectacle de la nature, loin d'élever mon âme vers le Créateur, excite mon estomac... »(*Corr.*, p.114 [17]). プルーストのほうも、コルク貼りの部屋に蟄居し、食が細いといったイメージが一般に流布しているものの、1901 年 8 月の 29 歳のときに母親に書いている——脂身で巻いた厚みの牛ヒレステーキを二枚もすっかり食べたあと、大盛りのフライド・ポテトと、クリーム・チーズと、グリュイエール・チーズと、クロワッサンをふたつ食べ、ビールを一瓶飲んだ、と（*Corr.*, II, p.444. Cf. *Corr.*, IV, p.225）。

しかし、二人の作家の作品の場合、旺盛で貪欲な食欲が刺激される場面だけを論じるのでは十分ではない。対象が所有されつくして消滅するわけではない。満腹感が反芻されているわけではない。フロベールの場合、ジャン = ピエール・リシャールが分析するように [18]、食べものを一方的に嚥下し吸収しつくしてしまう行為よりも、対象となる料理の質そのものをそのなかに浸透し、浸潤するように描いている。つまり、主体と対象との双方からの出会い、接触を通して行なわれる消化という「驚異的な化学反応 [19]」が注目されている。その内的で質的そのものに関心が集中するである。したがって、関心は個々の食材の表面のみにはとどまらなくなる。

こうして個々の食材は確固とした輪郭を失い、たがいに溶け合った状態、つまり練りあわされたこね粉という意味での生地(pâte)の状態を表す表現がフロベールの作品には頻出するようになる。レオンがエンマの手を握る箇所でも、次のような pâte の例が引ける——« Il la sentit donc, entre ses doigts, cette main. Elle parut à Léon être flexible, suante, molle, désossée. Une trajection subtile lui monta le long du bras jusqu'au coeur, tandis que la partie la plus intime de lui-même se fondait dans cette paume molle, comme de la pâte qu'elle y aurait maniée lentement.[20] » 溶けあう状態という点では、『11 月』のなかからも次の文が引用できよう—— « (Il) se sent le coeur plus mou et faible qu'une pêche qui fond sous la langue [21] ».

プルーストにおいても料理の同じ状態が好まれている。バルベックで花咲く乙女たちの魅力が語られるとき、それはレオンがエンマの手を握る上

記の引用と同じ pâte という語がやはり中心的な役割をはたしている——(...) il est si court ce matin radieux qu'on en vient à n'aimer que les très jeunes filles; celles chez qui la chair comme une pâte précieuse travaille encore. Elles ne sont qu'un flot de matière ductile pétrie à tout moment par l'impression passagère qui les domine(*JF.*, II, p.259).

料理係りフランソワーズはパリでも料理の腕をふるうことになるが、その時に供せられる「ニンジンの香りのしみたゼリー寄せ」も、このフロベールの pâte を髣髴とさせる表現で描かれている—— « Il faut que le boeuf, il devienne comme une éponge, alors il boit tout le jus jusqu'au fond »(*J.F.*, II, p.476). この食材同士がたがいに十分よく溶けあったような「ゼリー寄せ」は、主人公の父親が上司筋のノルポワ侯爵をアパルトマンに招き供応する際に出されるが、ノルポワはその味に驚嘆し、さらに取り分けてほしいと言う。最終巻『見出された時』巻末近くで、話者はこの「ニンジンの香りのしみたゼリー寄せ」を再度取りあげ、自分はフランソワーズがそれを作ったようにして小説を執筆してゆく、と書く。「あんなに多くの肉片」(*T.R.*, IV, p.612)を入れて「豊かなものにされた」ゼリー寄せ(«(...) tant de morceaux de viande enrichissent la gelée »)を作るフランソワーズは、知的な人々よりも、「本能的な理解力によって」芸術創作というものを把握しているとされる。プルーストにおける料理は、コンブレやドンシエールにおいてだけでなく、こうした点からも芸術作品と密接に関連づけられる。なお、この「ゼリー寄せ」は、ニンジンのほかに三種類もの肉片をじっくり時間をかけて煮こんで作られていて、その食材選びの仕方は完璧な大理石を八ヶ月もかけて選びだすミケランジェロにもたとえられている(*J.F.*, II, p.449, p.476)。カイエ 21 においてはパリの中央市場でフランソワーズが買いだす肉は、jarret de boeuf と pied de veau だったが、その後 1918 年版のガリマール社の校正刷りにおいてさらに les plus beaux carrés de romsteck が加筆追加されている。コンブレの昼食においても料理の果たす役割が原稿の生成段階でさらに強調されたことを確認したが、ここでも食材の数が増やされていることが確認できるのである。

なお、こうしてフロベールやプルーストにおいては大掛かりな料理の場面が欲望の解放やさらには芸術創作への契機にもつながってゆくのであり、前者から後者への影響がたどれるのである。こうした描写がなされる社会的な背景も簡単に素描しておきたい。フランス 19 世紀後半の食生活における大きな事件ともいうべき変革は、昼食のために昼の休み時間が制度として勤労者たちに認められるようになったことであろう [22]。また、それまでは貴族などの上流階級の特権としてのみ存在した食などの歓楽への嗜好が、やはり 19 世紀後半に民主化され、より幅広い民衆によっても享受されはじめていたのである [23]。

≪土地の名、もうひとつの旅≫

フロベールとプルーストの作品においては、主人公たちは地名の名についてしばしば楽しげな夢想にふける。フロベールは、新婚生活にすぐに失望したエンマに次のように言わせている—— Pour en goûter la douceur, il eût fallu, sans doute, s'en aller vers ces pays à noms sonores où les lendemeins de mariage ont de plus suaves paresses ! Dans des chaises de poste, sous des stores de soie bleue, on monte au pas des routes escarpées, écoutant la chanson du postillon, qui se répète dans la montagne avec les clochettes des chèvres et le bruit sourd de la cascade(*Op., cit.* p.327-328.)

エンマは、こうして「その地名が耳に快く響く国々」(ces pays à noms sonores) に結婚の翌日に旅立ち、甘美なけだるさを味わうべきだったと思う。実際の土地の具体的な細部は描かれず、まず地名の響きの魅力が喚起され、またその国々で耳にするであろうさまざまな物音が夢見られている。

彼女がパリを夢想するときも、まずそのパリという地名の音ほうが描写される。エンマはそれを小声で繰りかえすが、その響きはさらに高まってゆく。エンマは音素を集めてゆく。—— « Comment était-ce Paris ? Quel nom démesuré ! Elle se le répétait à demi-voix, pour se faire plaisir ; il sonnait à ses oreilles comme un bourdon de cathédrale ! Il flamboyait à ses yeux jusque sur l'étiquette de ses pots de pommade. (p.343).

『11 月』からも固有名詞ではないもの、語の発音の響きに耳を傾け、重要なことを見つけだそうとする—— « (...) je tâchais de découvrir, dans les bruits des fôrêts et des flots, des mots que les autres hommes n'entendaient point, et j'ouvrais l'oreille pour écouter la révélation de leur harmonie »(*Op., cit.* p.414). そして、フロベールはルイーズ・コレに『11 月』について手紙にこう書いている—— « Si tu as bien écouté *Novembre* tu as dû deviner milles choses *indisables* qui expliquent peut-être ce que je suis »(le 20 mars 1847).

『ブヴァールとペキュシェ』においても、地名は現実を表すものである以前にやはり「何も明示しない」ものであるからこそむしろ美しいものとして想像されている—— « D'après de certains noms, ils imaginaient des pays d'autant plus beaux qu'ils n'en pouvaient rien préciser [24] ». 発音によって自由で多様な想像が呼びさまされることのほうが重要となり、直接指し示されるはずの現実の指示対象のほうは明示されない [25]。意味が固定された因果関係の脈絡で書かれる通常の言葉でなく、力に富み想像へと呼びかけてくるもうひとつの声のほうが注目されている。

『失われた時』においても、旅はしばしば描かれているが、その根本はフロベールのそれにきわめて類似している。 まず、地名の名の響きこそが場所に関する多くの物事を喚起するという詩的な認識は、プルーストの場合フロベールよりもさらに展開され反復されることになる。『花咲く乙女たちのかげに』で若い主人公がはじめてパリから Balbec-en-Vieux(Balbec-en Terre)に到着し、そこに失望をおぼえ、さらに軽便鉄道に乗り Balbec-Plage のグランド・ホテルに向かう際の記述を読むと、土地がここでも地名の発音によって喚起されるものとして把握されている。

> A tout moment le petit chemin de fer nous arrêtait à l'une des stations qui précédaient Balbec-Plage et dont les noms mêmes (Incarville, Marcouville, Doville, Pont-à-Couleuvre, Arambouville, Saint-Mars-le-Vieux, Hermonville, Maineville) me semblaient étranges, alors que lus dans un livre ils auraient eu quelque rapport avec les noms de certaines localités qui étaient voisines de

Combray. Mais à l'oreille d'un musicien deux motifs, matériellement composés des plusieurs des mêmes notes, peuvent ne présenter aucune ressemblance, s'ils différent par la couleur de l'harmonie et de l'orchestration. De même, rien moins que ces tristes noms faits de sables, d'espace trop aéré et vide, et de sel, au-dessus desquels le mot « ville » s'échappait comme vole dans Pigeon-vole [26], ne me faisait penser à ces autres noms de Roussainville ou de Martinville (...) (*JF.*, II, p.22).

軽便鉄道の路線図が紹介されるはずなのに、実際にはその鉄道沿線には位置していないアンカルヴィル、マルクーヴィル、ドヴィル、アランブーヴィルといった語末がヴィル（-ville）でおわる地名が、ときとしてバルベックとは遠く離れたフランスの各地から集められてきて並べられている。遠いパリ東部のシャンパーニュ地方に位置するエルモンヴィルや、ユール県とユール・エ・ロワール県に一箇所ずつ存在するマルクーヴィルをはじめ、ここに列挙された 8 つの町のうち 5 つの町は、たがいに遠く離れた 4 つの地方に散在している。これらの 5 つの町にさらに他の 3 つの町を加えて、一本の鉄道路線を編成することは実際地理上不可能である。また、この非現実で夢想の路線図は、1914 年の校正刷りではさらに徹底したものにされていた。この 1914 年の段階では、列挙される地名は 4 つだけで、Bergeville, Criqueville, Equemanville, Couliville となっていて、これらの場所を一本の路線上に並べることはやはりできない。ヴィルでおわる地名しか並べられていなかったのである [27]。描かれるのは現実の行程でさえない。その後も、地名の響きによってさまざまに喚起されるイメージの複数性の豊かさのほうが追い求められてゆく。

第六巻『ソドムとゴモラ』においてこの軽便鉄道の旅はもう一度描写されるが、さらに多くの駅名が時刻表から今度はフランス全土から借りてこられ、またはプルースト自身の想像からも作られ、地名の語源に関する叙述——たとえば、Hippolyte Cocheris, Origine et Formation des noms de lieu, Librairie de l'Echo de la sorbonne, 1874, [28] からの借用——もますます増える。

エルスチールの物の見方も挿入され、芸術への言及が鉄道の旅に加えられている。しかし、上述した初回の時とその基本は同じで、この二度目の旅においても、これらの全国に点在してしまっている地名を一本の鉄道で結ぶことは不可能である。これらの町は、周遊旅行を組むとしても地理上ほぼ不可能なほどたがいに遠く離れて点在していて、地理上ある一定の整合性をもって並べられているわけではない。アンドレ・フェレもこれらの地名が実際は 7 本もの実在の鉄道路線から引用されていることを明らかにしている [29]。ここでもやはりヴィル（-ville）でおわる地名そのもののほうが重要視されているのである—— Incarville, Douville, Decauville, Balbec, Grattevast, Angerville, etc (SG., III, p.180)。 また、主人公が Maineville-la- teinturière で下車することもこの直後に語られる。

さらに、軽便鉄道の終点に到着後主人公はホテルのフロントで一通の死亡通知を渡されるが、そのリストに並んで書かれている貴族たちの名前も多くがヴィルでおわっている。それらはゴンヌヴィル侯爵夫妻、アンフルヴィル子爵夫妻、ベルヌヴィル伯爵夫妻、メーヌヴィル伯爵夫人、アムノンクール伯爵、フランクト伯爵夫妻、エグルヴィル家である—— « (il y a) tout le ban et l'arrière-ban des nobles de la région qui faisaient chanter leurs noms (...) aux joyeuses finales en *ville*, en *court*, parfois plus sourdes (en *tot*). (...) ils avaient l'air d'avoir sonné le rassemblement de tous les jolis villages échelonnés ou dispersés à cinquante lieues à la ronde et de les avoir dispersés en formation serrée, sans une lacune, sans un intrus, dans le damier compact et rectangulaire de l'aristocratique lettre bordée de noir(*SG.*, III, p.182).

ここにおいては同じ固有名詞でも家名のほうが列挙されているが、地名の列挙と同様のことが反復されているといえよう。語末がヴィルの苗字——その発音は「陽気なものであり」、貴族たちは苗字を「歌うように発音」する——が多く通知の枠内のリストに並べられてはいるものの、かれらの出身地のほうは実は「四方にわたって」たがいに遠く離れているのである [30]。

この第二回目の旅の場面では、第一回目の時と同様、画家エルスチール

の物の見方を主人公がすでに自己のものにしていることがわかる(*SG.*, III, p.179)。なお、すでに料理について論じたとき、料理がしばしば作曲や絵画にたとえられていたのをわれわれは見てきた。

この独特の旅の描写は、« voyages circulaires » の案内広告などを見て刺激された若い主人公が、第一巻第三章 « Noms de pays : le nom » においてめぐらす夢想の場面からもすでに読みとることができる。まず次の一節——« Je n'eus besoin pour les faire renaître que de prononcer ces noms : Balbec, Venise, Florence, dans l'intérieur desquels avait fini par s'accumuler le désir que m'avaient inspiré les lieux qu'ils désignaient(*Sw.*, I, p.380). たとえばフィレンツェについて若い主人公は、「花冠にも似た、不思議な香りのこもる町を思い描く」のだが、その理由もこう説明されている—— « (...) parce qu'elle s'appelait la cité des lys et sa cathédrale, Sainte-Marie-des-Fleurs. » つまり、ふたつの表現の末尾の響きが、それぞれ「ゆり」と「花」を呼びさますからなのだ。

なお、同じ章においてパリとバルベック間を結ぶ 1 時 22 分発の汽車を夢想するとき、若い主人公はすでに駅の名から夢を紡いでいた。以下の駅名のリストにおいても、ラニオンをのぞけば、いずれも町の地名の発音から——それも多くの場合やはり末尾の発音から——これらの「美しい町々」の魅力が想像されてゆく。なお、1 時 22 分発のこの汽車(*Sw.*, I, p.379 ; *JF.*, II, p.6)は、のちに 1 時 50 分発に変えられている(*AD.*, IV, p.153)。これは旅がそれまでの日常の時間を相対化し、画一的な時間から逸脱しはじめている 現われなのかもしれない。

> (...) comment choisir plus qu'entre des êtres individuels, qui ne sont pas interchangeables, entre Bayeux si haute dans sa noble dentelle rougeatre et dont le faîte était illuminé par le vieil or de sa dernière syllabe ; Vitré dont l'accent aigu losangeait de bois noir le vitrage ancien ; le doux Lamballe qui, dans son blanc, va du jaune coquille d'oeuf au gris perle ; Coutances, cathédrale normande, que sa diphtongue finale, grasse et jaunissante couronne par une tour de beurre ; Lannion avec le bruit, dans son silence villageois, du coche suivi de la mouche ;

Quetambert, Pontorson, risible et naïfs, plumes blanches et becs jaunes éparpillés sur la route de ces lieux fluviatiles et poétiques ; Benodet, nom à peine amarré que semble vouloir enraîner la rivière au milieu de ses algues, Pont-Aven, envolée blanche et rose de l'aile d'une coiffe légère qui se reflète en tremblant dans une eau verdie de canal ; Quimperlé, lui, mieux attaché et depuis le Moyen ge, entre les ruisseaux dont il gazouille et s'emperle en une grisaille pareille à celle que dessinent, à travers les toiles d'arignées d'une verrière, les rayons de soleil chngés en pointes émoussées d'argent bruni ? (*Sw.*, I, p.382).

ケスタンベールの魅力は、末尾の ber「(荷車の) 荷台枠」が「道のうえに散乱している白い羽根と黄色のくちばし」を想起させたとも思われるし、ポントルソンは接頭辞の pont-「橋」から「詩的なあの水郷へと向かう道」が喚起されたはずで、いずれのケースでも地名の発音によって話者の想像力が刺激され、連想が働きはじめる。ベノデ(Benodet)も、その最後の発音のなかに実在の「ノデ川」(l'Odet)の音が含まれ、その川がベノデの町で海にそそぎこんでいるので、「からくも岸につながれているこの地名を、川が水藻のまんなかに引きずりたがっている」という想像が生じたのであろう。こうして、この引用文中でもやはり多くの地名の語末の発音から夢想がかきたてられている。固有名詞によって一般に課せられてきた現実としての指示対象だけとらえるのはでなく、読者はこれらの地名の響きをまず受け止め、そこに秘められてきた多くの潜在的な意味をも想像し再生させなくてはならない。

このほかにも、人名の名の発音によって呼びさまされるものではあるが、若い主人公はゲルマント家を、家名の最後の 音綴 « antes » の発音から連想によって生じるオレンジ色の夕陽に浸されているように思い描いていたのである—— « (...) baignant comme dans un coucher de soleil dans la lumière orangée qui émane de cette syllabe : « antes » »(*Sw.*, I, p.169). また、ネルヴァル『シルヴィ』の火の娘シルヴィの色彩をプルーストは深紅だとするが、それはシルヴィ Sylvie の発音にある「二個のイの音」から喚起されるから

だとされる（*CSB.*, p.239）。

こうした言語観は、観点をひろげて考えてみるならば、声の響きやそのリズムに関心を寄せることによって得られるものであろう。事実フロベールやプルーストは、地方の民衆によって話される方言を好み、そのいくつかの声を作品になかに直接引用し書き留めている。地名の響きに耳をすます姿勢はこうしたパロールへの愛着から生まれてきたのだ。この点については、前者の場合、アルベール・チボーデや、D.L. デモレストによってすでにくわしく述べられている[31]。プルーストも、庶民の表現に愛着をおぼえ――しかし日常会話をそのまま引き写すということではない――それらの言葉のいくつかを『失われた時』のなかに同様に直接書き写している。反対に、両者の場合、閉鎖的なサロンで用いられるあまりに常套的な、あるいは衒学的な書き言葉は嫌っていた[32]。また、ふたりの小説家とも、当時のフランスにおける国語教育の柱のひとつでもあった雄弁を好まなかった[33]。

なお、エンマに関連する旅は――ルーアンにおけるレオンとの馬車でのひそかな道行きも含めて――リビドとも関係するが、プルーストの場合はも、旅にはアルベルチーヌへの欲望ががからんでくることが多い。二回目の一時間の軽便鉄道の旅も、主人公がアルベルチーヌへの欲望を抑えきれなくなり、彼女に急に会いたくなったため急きょ企てられたものである。また、実際、車中で主人公はアルベルチーヌへキスする機会をつねにうかがう(*SG.*, III, p.251)。また、列挙される-ville でおわる町々の名は、欲望の対象としてのアルベルチーヌとなんらかの関連をもっていることが多い――Incarville（アルベルチーヌとアンドレが同性愛を疑わせるようなダンスに興じる。*TR.*, IV, p.99-100）、Toutainville（『見出された時』においてアルベルチーヌへの激しい嫉妬をかきたてる駅名であることがわかる。*Id., ibid.*）, Epreville（アルベルチーヌが下宿している。彼女への激しい嫉妬がかきたてられる駅名。*Id., ibid.*）, Montmartin-sur-Mer, Parville-la-Bingard（アルベルチーヌが下車する。ここでもアルベルチーヌとアンドレのダンスに疑いをおぼえる。）, Saint-Frichoux, Doncères, Féterne, Infreville, Hermonville,

Amenancourt, Bricquebec, Maineville（アルベルチーヌが下車する。娼家がある。）, Renneville, Egleville, Saint-Mars, Saint-Martin-le-Vieux, Fervaches, La Sogne, *etc.* Incarville から出発するとき、また Parville の駅に到着しようとするときに、主人公はかってヴァントュイユ嬢が同性愛にふけるのを目撃したモンジュヴァンを思い出している。

このように旅に女性への欲望がからむことは、第二回目の旅の時だけでなく、一回目のバルベックへの旅の際も描かれている。そのパリーバルベック間の旅のあいだに汽車は小さな駅にとまるが、そこで牛乳入りのコーヒーを売りに車内にまで入ってきたその地方の少女に主人公はすでに「興奮」をおぼえ、またいずれ「再会したいという欲望」を抱いている(*JF.*, II, p.18)。ジャック・デュボワは « Proust ferroviaire[34] » において、この少女はアルベルチーヌの前身の一人だと分析している。また、これらの二回の旅では主人公は、同行する祖母にたいして心理的に距離を置こうとし、祖母がその中心的な存在の一人であったそれまでのコンブレでの生活との懸隔感が表されている。初回の汽車のなかで主人公がアルコールを飲むのを祖母はやむなく認めることになるが、祖母の疲労が描かれたあと、主人公は「できれば祖母よりも立派な人と一緒にいたかった」と言っている(p.22)。二回目の車中でも、この場面が蘇ってくる。新しい世界へ出奔したいという願望はこうした描写によってすでに表されている。初回の旅の際に、主人公はすでに旅による高揚感が自分を「未知の、とても比較のできないほど興味深い宇宙」(p.18)に導いてくれることを感じている。

『ボヴァリー夫人』のエンマが、「その地名が快く耳に響く国々」へ結婚式の翌日に出掛け甘美なけだるさを味わうことを夢見たとき、その夢想は官能性で染められていたが、プルーストにおいてもこの旅にはアルベルチーヌへの嫉妬がからむ独特の官能性が伴うのである。

ところで、稀には引用文中の Vitré のように、響きによるだけではなく地名の文字表記の形が想像をかきたてる場合もあるが、「周遊旅行」(« voyages circulaires »(*Sw.*, I, p.378))の案内広告の文字が主人公をバルベックへの旅にいざなう箇所も同じように文字の形が強い契機となっているといえよ

う。『失われた時』には、街角の広告塔に貼られたポスターでラ・ベルマの文字を見つけ、その観劇に胸をふくらませる場面も描かれている。これは、フロベールの作品でも見られることであり、『感情教育』でアルヌーの名前が本屋のパンフレットに大きく載っているのを見たフレデリックは、それをなにかしら並外れたものと思い、それに刺激されてアルヌー夫人について想像を巡らしはじめている。

なお、『ボヴァリー夫人』では、「その地名が耳に快く響く国々」に結婚の翌日に旅立ち甘美なけだるさを味わうという官能的な旅を夢想するが、その際「駅馬車に揺られ、青い絹の日影のかげに、(…) けわしい道々をゆっくりとのぼってゆくのだ」—— « sous des stores de soie bleue » という表現がつづく。『ソドムとゴモラ』における軽便鉄道での二回目の旅の際も、やはり「青い日よけをおろして」—— « je baissai le store bleu » ——アルベルチーヌへの欲望をおぼえながら主人公は旅をつづけている。

なお、地名の響きには関係しないものの、地名が無秩序に列挙される場面に性の欲動がかんでくることは『ボヴァリー夫人』にも起きている。ルーアンでエンマとレオンが「窓掛けをしめきって」馬車のなかにこもり、恋の道行をきめこむとき、馬車の動きは次第に無秩序になり、ルーアンのよく知られた道は雑然とあらゆる方向に交錯し、市外図で確かめてもありえない道程がここには現出する。読者は馬車のなかにいるふたりの恋の高まりについて想像せざるをえなくなる—— « (la voiture) revint ; et alors, sans parti pris ni direction, au hasard, elle vagabonda. On la vit à Saint-Pol, à Lescure, au mont Gargan, à la Rouge-Mare et place du Gaillard-bois ; rue Maladrerie, rue Dinanderie, devant Saint-Romain, Saint-Vivien, Saint-Laclou, Saint-Nicaise, — devant la Douane, — à la Basse-Vieille-Tour, aux Trois-Pipes et au Cimetière Monumental » (p.514-515).

しかしながら、最後にはフロベールの場合と同じように、旅はプルーストにおいても失望に変わる(*P.*, III, p.762)。旅と恋愛においておぼえる失望は類似する、とプルーストは続けている。

*

『ボヴァリー夫人』以降、フロベールの文体においては比喩はあまり多くは用いらず、それもしばしば視覚的なものとなっている。外部の現実はおもに絵画的に捉えられているし、まだ現実の外在性や主題は明白である。しかし、これにたいしてプルーストのほうは、ジュヌヴィエーヴ・ボレームが指摘するように、知覚はより音楽的なものとなっていて、印象をとうして意識の内部に入ってゆく[35]。プルーストのほうが読者の参加を強く促す。こうしたいくつかの側面においては、両者の文体は対極的でさえある。しかし、アルベール・チボーデはその『ギュスターヴ・フロベール』を両者の文体の類似点を比較することによって閉じているのである[36]。フロベールは、現実の観察などということは実は二義的なことにすぎない（*Corr.*, vol.5, p.36）、現実はスプリング・ボードにすぎない（*Corr.*, vol.4, p.52）と書いているし、プルーストもサロンで「観察しているんです」と言いはなつ新聞記者を皮肉をまじえて描き、現実は半分であり、残りの半分は自分たちの中に伸びてきているのだとも書いている。

枠や束縛から解き放たれ抑圧されなくなった欲望に衝き動かされながら、食卓でも旅でも、自分の世界を、現実に立脚させつつも、大きく奔放に想像へと押しひろげる術をプルーストはフロベールから学びとったのではないだろうか。食材という求心と旅という遠心の勢いを得て、食欲や聴覚などの諸感覚を活性化しつつ、多様に視点を展開させることによって、直線的に進行するいわゆる物語という説話のロジックは押しひろげられ、そこに主人公のコンブレからバルベックへの脱出願望やあらたな世界への欲望がひそかに投影されてゆく。プルーストはそれから出発し、さらには芸術への言及を足すなどして自己独自の世界を展開させた。こうした描写はすでにいわゆる物語よりも重要な役割を演じはじめている。これらの夢想へと誘う描写は、すでに画一的な作為に陥りはじめていた 19 世紀の小説のジャンルに、行為としてのあらたな可能性を切り開きはじめてもいたのである。

注

1 *Correspondance de Marcel Proust*, éd. par Philippe Kolb, Plon,
2 Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971.
3 *Contre Sainte Beuve*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971.
4 Cf. Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust biographie*, Gallimard, 1996, p.630-631.
5 Elisabeth Carbonne-Arlyck, « Pièce montée et sorbets : Flaubert et Proust », *French Forum*, 3(1978), p.56-64. Gérard Genette, « Flaubert par Proust », *L'Arc*, 79(1980), p.3-17. Marcel Muller, « Proust et Flaubert : Une dimension d'intertexualité de A la rechreche du temps perdu », in *Proust et le texte producteur*, textes réunis par John Erickson, et Irène Pagès, Université de Guelph, 1980, p.57-70. Annick Bouillaguet, Marcel Proust : *Le jeu intertextuel*, Nizet, 1990. Mireille Naturel, « Le rôle de Flaubert dans la genèse du texte prustien », *Bulletin Marcel Proust*, 43(1993), p.72-81. Mireille Naturel, *Proust et Flaubert : un secret d'écriture*, Amsterdam-Atlanta, Rodopi, 1999. Annick Bouillaguet, *Proust lecteur de Balzac et de Flaubert, L'imitation cryptée*, Champion, 2000.
6 *Flaubert oeuvres* I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977, p.716.
7 Jean-Pierre Richard, « La création de la forme chez Flaubert », *Littérature et sensation*, le Seuil, 1954, pp.119-164.
8 *Op. cit.*, p.335.
9 マクシム・デュ・カン宛書簡、1846 年 4 月。
10 *Oeuvres complètes*, II, Conard, 1910, p.37.
11 パスカル・オリイ「ガストロノミー（美食）」、ピエール・ノラ編『記憶の場』第 3 巻所収、岩波書店、2003 年、p.410.
12 Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p.243.
13 *Op., cit.* p.214, 221, 243.
14 Annick Bouillaguet, *Proust lecteur de Balzac et de Flaubert, L'imitation cryptée*, p.113-115.
15 *Id., ibid.* p.195-196.
16 Mireille Naturel, *Proust et Flaubert, un secret d'écriture*, Rodopi B.V., 1999, pp.151-155.
17 *Correspondance*, t. IV, Club de l'honnête homme, 1975, p.114.
18 Jean-Pierre Richard, *op., cit.* pp.125-132.
19 *Id., ibid.* t. III, p.383.
20 *Madame Bovary*, éd. Pommier, p.316.
21 *Novembre*, Garnier-Flammarion, p.199.

22 Eugen Weber, *Fin de siècle, La France à la fin du XIXe siècle*, Fayard, 1986, p.92.

23 Pierre-Olivier Walzer, *Le XXe siècle I, Litterature française*, Artaud, 1975, p.84.

24 *Bouvard et Pécuchet*, Galliamard, « Folio », p.61.

25 Philippe Dufour, *Flaubert ou la prose du silence*, Nathan, 1997, p.142-147.

26 なお、引用文の下から二行目に書かれている「鳩は飛ぶ」(Pigeon-vole)は、子供のゲームのことであり、まず一人が「鳩が飛ぶ」と言うと、参加者たちは飛ぶ動物や物を挙げてゆくが、もしそれが実際に「飛ぶ」ものならば、他の子供たちは指を上げ、飛ばないものなら指を下げなくてはならない。子供たちの言う文の末尾はつねに「飛ぶ」(vole)の発音でおわるのであり、こうした文の声と比較されることにより、ヴィルの発音でおわるいくつかの地名の特徴が強調されている。

27 *JF.*, II, p.1450, n.*a* et n.1.

28 *SG.*, III, p.1498, n.1.

29 André Ferré, *Géogrphie de M. Proust*, Sagittaire, 1939, p.105.

30 なお、この語尾の-ville　については、語源解釈を好むブリショの説明によると次のようになっている—— « Dans presque tous ces noms qui se terminent en *ville*, vous pourriez voir encore dressé sur cette côte, le fantôme des rudes envahisseurs normands(*SG.*, III, p.484). »　こうして、旅などが描かれる際は、フロベールもプルーストの場合も、ある特定の一つの小さな場所に限られることは少なく、いくつかの場所から構成される地域にまで拡げられることが多い。人物が登場しても、個人が一人だけ描かれるのではなく、その周囲の土地なり、関連する人物たちを含む集団が扱われることがしばしばである。ville「町」という語が好まれ頻出するのは、こうしたものの見方によるものだとも思われる

31 Albert Thibaudet, *op., cit.* D.L.Demorest, *L'expression figurée et symbolique dans l'oeuvre de Gustave Flaubert*, Slatkine reprints, 1967, p.49.

32 Gustave Flaubert, *Correspondance*, t.II, p.52. Phillipe Dufour, *op., cit.*, p.167.

33 フロベールに関しては、D.L. Demorest, *op., cit.* p.37. G. Genette, *op., cit.* p.15.　プルーストの関しては、*Corr.*, X, p.231. XVIII, p.459. XXI, p.479. *PM*, p.189.

34 Jacques Dubois, « Proust férroviaire », *Savoirs de Proust*, Université de Montréal, 2005, p.21.

35 *Op., cit.* p.198-207.

36 *Op., cit.* p.296.